



株式会社神戸屋

津田 宜季 Tsuda Yoshiki

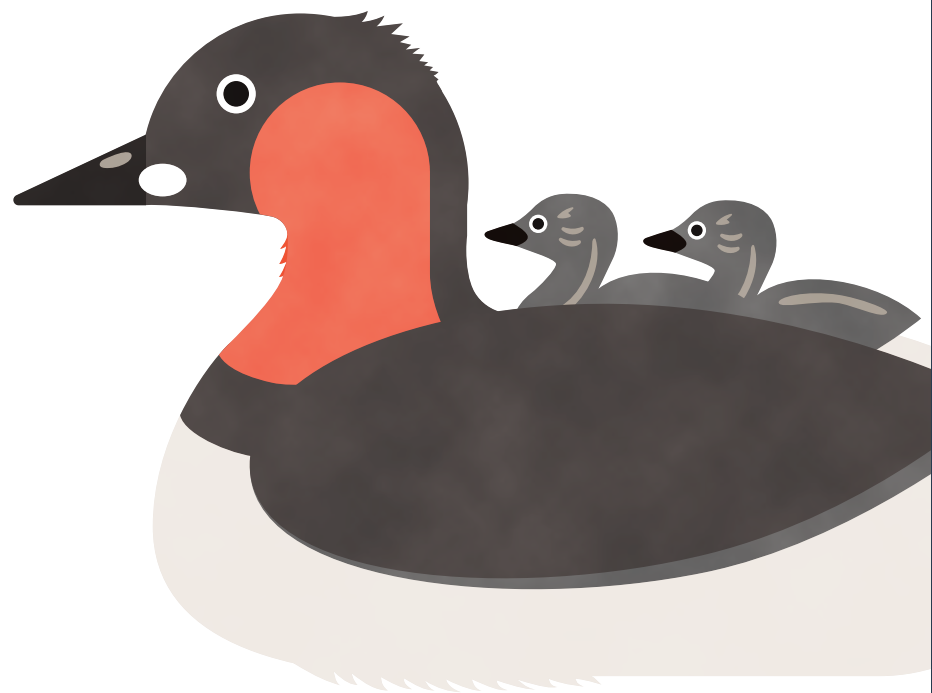
アマタ株式会社

石田 みずき Ishida Mizuki

2021 FEBRUARY

07 地創人

卒業生の今

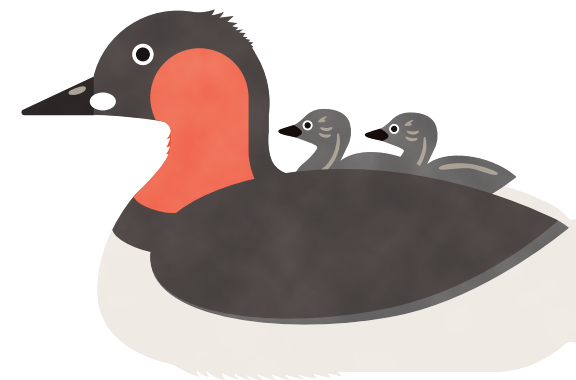


USP ★
STARS | 07
2021
FEBRUARY



滋賀県立大学 OBOG Magazine
県大の星 第7号

発行月 | 2021年2月
発行 | 滋賀県立大学 経営企画課
〒522-8533 滋賀県彦根市八坂町 2500
Tel.0749-28-8200 Fax.0749-28-8470



- CASE -

01

地創人

キャンパスは琵琶湖。
テキストは人間。

このモットーを胸に
社会で活躍する卒業生の原点に迫るインタビュー

異なる世界を突き進む、 飽くなき創造力

今回お話を聞いたのは、
株式会社神戸屋で商品開発を行いながら
パンのワールドカップ「クープ・デュ・モンド」で
世界2位に輝いた津田 宜季さん。
ビジネスの立場から環境課題の解決に携わる
アミタ株式会社で、「持続可能な社会の実現」を使命に
企業が抱える課題に向き合う石田 みずきさんの2名です。
同じ学部を卒業したお二人ですが、その進路は全くの異業種。
歩んできた道のりも、日々向き合うものも全く異なります。
そんなお二人の共通点は、地域や社会、人の暮らしの中で
新しい価値を生みだそうというクリエイティブな姿勢。
理想とする未来へと歩み続ける姿は、
「人が育つ大学」で育ったたくましさを感じさせるものでした。
学生時代の楽しい思い出も振り返りながら、
今までとこれからのことについて語っていただきました。

大学時代の出会いと経験が、
パン作りの夢を叶え、
豊かな人生へと導いてくれた

Tsuda Yoshiki

津田 宜季

株式会社神戸屋
マーケティング本部 商品開発部

自然あふれる環境に惹かれ
滋賀県立大学へ

高校時代、興味を持っていた農学について学べる大学を探していて、出会ったのが滋賀県立大学でした。パンレットを見て、学びの内容や大学の雰囲気は惹かれ、実際に見学に訪れてみると、自分が生まれ育った大阪とはまた違った自然豊かな環境にとても魅力を感じました。今までは違う生活の中で色々な経験ができそうだなと思い、入学を決めました。

生物資源管理学科は、環境科学部に属する学科ということもあり、農業だけでなく環境という広いテーマに触れる学びが多くあります。実際に農作物を育てて研究することはもちろん、持続可能な環境サイクルの中でどうやって農業を発展させていくかなども勉強しました。

学部学科を越えた
個性豊かな仲間との出会い

バレーボール部に所属し、大学の4年間はクラブの仲間たちと多くの時間を共に過ごしました。メンバーは学部も学科もばらばらで、



建築を学ぶ人やデザイナーを目指す人など、一人ひとりが個性豊か。分野は違っても、それぞれが自分の道を進んでいく姿に良い刺激を受けました。学部や学科の枠を越えた友人たちとの出会いは、総合大学ならではの魅力だと思います。

滋賀県立大学はのびのびとした雰囲気、友人たちも積極的に発信したり行動したりするクリエイティブな人が多かったように思います。パーベキューをするときには、自分たちで本格的なパークウインターを作って即興でドリンクを提供するなど、決まりきったことをするより自分たちで楽しいことを企画したい、そんな仲間が集まっています。

アルバイトを通して芽生えた
「食」への関心

「食」に関心を持つようになったのは、大学時代のアルバイトがきっかけです。勤務していたカフェでは、サピスのほか料理やお酒作りなども担当していました。あるとき、そのカフェで新しく屋台を立ち上げることに、一からお店作りに関わるようになったのです。初めは屋台センターで材料を買って来て、トタン

屋根を張るところからのスタート。屋台でどんなメニューを出すのかも自分たちで考えました。アルバイトの立場でも色々な仕事を任せてくれるオーナーだったので、普通



ではなかなかできないような貴重な経験をさせてもらえました。色々なことに挑戦しているうちに、「食」やものづくりへの興味がどんどん深まっていきました。

フランスでの体験をきっかけに
パン作りの道へ

その後、勤務していたカフェのオーナーの先輩にあたる、フレンチレストランのオーナーシェフから、店を手伝ってほしいと声を掛けられて、アルバイトを始めました。そのオーナーシェフは、「食」にかける思いや仕事への向き合い方に対してとても厳しい方で、初めの方は怒られては落ち込むような日々でした。フランス料理の面白さや、食だけでなく文化も含めて多くのことを教えてもらううちに、フランスの魅力にどんどん引き込まれていきました。

やがて話を聞くだけでなく、実際に自分の目で見てみたいと思うようになり、大学3年生のときに友人とフランス旅行へ、そのとき、泊まっていたホテルの近くのパン屋さんで、近所の人たちがバゲットを買うために毎朝並んでいる風景を目にしました。特に有名店というわけでは

ないごく普通のパン屋さんです。その風景を見て、「こんなふうに日常に密着した仕事に携わりたい、パン屋になりたい」という気持ちが自分の中に芽生えました。それまでパンを作った経験もなかったのに、この旅をきっかけに一気に将来の方向性が決まりました。

パン作りの世界には、国内外のさまざまなコンテストがあります。積極的に応募するよう会社も後押ししてくれるので、職場の先輩たちもよく応募していて、自分もいつか挑戦したいと考えていました。

パン作りを始めて2年ほど経った頃、自分もやってみたくて申し出て、初めてコンテストに応募しました。そのコンテストで書類選考に通過し、東京での最終選考会に参加することに。結局入賞はできなかったのですが、最終選考の場で他の企業の方や有名店のオーナーシェフなど多くの方と交流できたことがとても良い刺激になりました。この経験をきっかけに、コンテストに取り組みむことに夢中になっていきます。

日本代表として
世界大会で準優勝

新年を祝うフランスの伝統菓子「ガレット・デ・ロワ」のコンテストにも挑戦。一回目は落選してしまいましたが、二度目のチャレンジで優勝することができました。このコンテストでは、国内大会で優勝すると、翌年にパリで開かれ



メーカーに就職し
製パンのキャリアがスタート

就職活動の時期を迎え、将来パン屋になるには、どこのお店で修業をするべきか、企業に就職するべきか、少し迷いがありました。でも、新卒で就職するという経験は今しかできない、企業で社会経験を積むことも必要だと考えて、パン作りが学べる神戸屋に就職する道を選びました。

入社1年目には、ベーカリーレストランでサービスタップとして接客などを担当。当時はパン作りに携わることができず、一度は辞めようと考えていたのですが、2年目にセントラルキッチンに異動になり、念願のパン製造を担当できることになりました。

希望がなかったものの、この現場では自分が未経験で、周りは熟練の職人ばかり。専門用語が飛び交う中、右も左もわからない状態でした。初めは緊張感のあまり夜も眠れないような日々が続きましたが、厳しい環境で多くのことを学ぶことができました。

コンテストへの挑戦に
夢中になっていく

国際大会に出場する権利が与えられます。2011年にパリで行われた大会では、10位に入賞することができ、これを機に、さらに多くの出会いや経験へとつながっていきました。

2017年には、パンのワールドカップと呼ばれる「グループ・デュ・モンド」という世界大会の日本代表メンバーに選出。そこから準備やトレーニングを重ね、2020年の大会に出場しました。この大会では、世界12ヶ国から各国1チーム3名が出場し、パン部門・ウイエノフズリー(※)部門・飾りパン部門の種目別に世界一を競います。私はウイエノフズリー部門の代表として参加し、日本チームは総合準優勝という成績を取ることができました。

※イースト発酵させたパン生地やさざまなヘイストリー生地を焼いた菓子パンの総称

「お」の一言で
どんな苦労も乗り越えられる

日本代表になってからは会社からのサポートもあり、時間を取って集中的にトレーニングできたのですが、それまでは仕事が終わった後や休日にコンテストの準備をしていたので、体力的に大変な時期もありました。作品の提出期限が迫ってきたり、徹夜になることも多かったです。真夜中に一人で何度もパンを焼いていると焦りが出



津田さんにまつわる



津田さん監修
ブリオッシュ・フィユテ

オレンジとチョコの2種類を監修。神戸屋レストランで販売しています。他にも開発に関わった商品がスーパーやコンビニに並んでいます。



実はごはん派

大学卒業後からパン作りへのめり込んできた津田さんですが、食べるのは断然ごはん派でした。



仕事の相棒

商品開発室は共用ですが包丁とめん棒は自分のものを愛用しています。



ベーカリーワールドカップ
2020 準優勝

パン作りを始めて約15年。日本代表メンバーの一人として出場しました。



- CASE -

02

地 創 人

Ishida Mizuki

石田 みずき

アマタ株式会社

インテグレートグループ
カスタマーリレーションチーム

滋賀県立大学での学びを活かし
持続可能な社会の実現を目指して
歩み続けたい

てきて、精神的にもかなり追い込まれました。それでも乗り越えられたのは、もともとまくなりたい、もっとおいしいものを作りたいという思いが常にあるからです。コンテストに挑戦しているのも、有名になりたいわけではなく、自分を高めていきたいという気持ちが原動力になっています。パン作りは時間もかかりますし、大変なことや辛いこともたくさんあります。でも、自分が作ったパンを食べたことで、「おいしい」と言ってもらえるだけで、疲れが全部吹き飛びます。それが私にとって一番のやりがいです。

作品作りと商品開発が互いに良い影響を及ぼす

現在、社内では商品開発を担当しています。試作を重ね、会議で提案して、そこで出た意見を元に改善して、というのを繰り返し、半年ほどかけて開発を進めていきます。

コンテストの作品作りと普段の商品開発では、同じパンでも考える内容は全く違います。商品は価格帯もある程度決まっていますので、それに合わせた材料や製法を考えますし、工場のラインで製造できるような設計にする必要があります。製造ラインに落とし込むことが難しい場合もありますが、現場の人と一緒に考えて課題を乗り越え、その結果、良い商品が生産できたときには大きなやりがいを感じます。



験が作品作りにも生きていますし、コンクルのためにトレーニングを積んだ経験は、商品開発にも活かされています。

どちらにとっても、発想の源になるのはやはり積み重ね。自分が見てきたものや経験してきたもの以外からは何も生まれませんと思うので、普段から常に意識してさまざまなものを見てインスピレーションするように心掛けています。

パン作りの魅力を後輩たちに伝えていきたい

大きな大会を終えた今は、お世話になった周りの人たちに恩返しをする期間。若手の育成にも力を入れていきたいと考えています。後に続く後輩たちが、どんどん新しいチャレンジをして成長していく姿を見るのが一番の楽しみです。パン作りには大変なこともありますが、楽しいことや良いこともたくさんあるので、そんなパン作りの魅力を伝えていきたいです。自分自身ももっとパン作りについて学んでいきたいですし、食全般の知識や文化についても勉強したいと考えています。

4年間の濃密な大学生活が人生を豊かにしてくれる

大学の4年間は、私にとってとても濃密な時間でした。大学時代に「食」やフランス文化に関心を持ったことが今の仕事に結びついていますし、人生を豊かにしてくれたと思っています。また、4年間を共に過ごしたバレーボール部のメンバーとは、毎年OB会が集まるなど卒業後も交流があり、それぞれの道に進んだ仲間たちは今も刺激を与えてくれる存在です。

勉強はもちろん、部活やサークル、アルバイトなどさまざまなことにチャレンジできるのが大学時代の魅力。そこで得た経験や出会った人たちの関係は、社会人になってからの財産になります。学生のみならず、滋賀県立大学ならではの素晴らしい環境を活かして多くのことを経験し、仲間たちと楽しく有意義な4年間を過ごしてほしいです。



クープ・デュ・モンド2020 受賞作品

津田 宜季

つだ・よしき

[環境科学部 生物資源管理学科 2004年度卒業]

2005年㈱神戸屋入社後、㈱神戸屋レストランのホールに配属され、接客業に従事。2年目に手づくりのセントラルキッチンに配属され、かねてより希望していたパン作りを学び始める。その翌年よりコンテストに出場するようになり、2009年にはフランスの伝統菓子、ガレット・ド・ロワの国内コンテストで優勝した。2012年に現在の商品開発部に配属。その後、ベーカリーワールドカップ日本代表に選出され、2020年1月に開催された大会で2位に入賞した。



環境問題に関心をもち
文理を問わず学べる滋賀県立大学へ

山間の地域に住んでいたことがあり、昔から自然が好きで、環境問題に関心を持っていました。滋賀県立大学を選んだのは、文理を問わず幅広い視野で環境を学べる学科があったからです。高校時代は文系で、環境といえどどちらかというと理系のイメージがあったのですが、環境政策・計画学科では文系理系の双方から学べることを知り、入学を決めました。環境政策・計画学科は、「社会の仕組みをどのように変えていけば課題を解決できるのか」というアプローチで環境問題に取り組みます。具体的には、調査やデータ分析の方法、集団における合意形成の取り方やファシリテーションの方法など、課題を解決するためのさまざまな手法について勉強しました。また、滋賀の豊かな自然環境を活かしたフィールドワークや、子どもたちに向けてエコなイベントを企画し



て実際に運営する授業などもあり、実践的で幅広い学びを得ることができました。

授業の一環としてベトナムのダナンを訪れ、現地の大学生と一緒にベトナムの環境問題について学ぶ機会もありました。フィールドワークで現地のゴミ埋め立て地を見学したとき、広大な土地に今まで見たこともないほどのゴミの山が連なる様子を目の当たりにして、衝撃を受けたことを覚えています。公書を経験している日本が、その経験や技術を海外に伝えていく必要があると実感しました。

「近江楽座」を通して
プロジェクト運営を体験

大学時代に力を入れて取り組んだことの1つが、「近江楽座」です。私は在日外国人の教育をサポートする「バンディラ・ジ・オウロ」というプロジェクトでリーダーを務めていました。

「近江楽座」は、学生が活動プログラムを考えてプレゼンテーションを行い、審査に通ったら助成金をいただいて1年間活動し、最後に報告を行うという流れで実施されています。年に一度の審査の場では、自分たちの活動の社会的な意義をしっかりと考えて説明できないと、評価していただけません。学生と、本物のビジネスと同じような意識を持つプロジェクト運営に携わることができ、とても貴重な体験でした。

「近江楽座」の活動を通じて、多文化共生の問題について学べたことも、私にとって大きな経験となりました。滋賀県は外国人労働者が多い地域で、ほとんどは非正規雇用で工場などで働く



「バンディラ・ジ・オウロ」の活動の様子

れています。彼らの子どもたちが日本の教育から取り残されてしまうことも多く、将来の選択肢が狭められてしまうという問題が起きているのです。貧困の輪が広がっていく状況を知り、一見豊かに見える日本においても、見えていない課題がたくさんあることを痛感しました。私自身、家族の病気がきっかけで、経済的な理由から進学が難しくなった経験がありました。私の場合は、奨学金制度を使って大学に通うことができたのですが、「学ぶチャンスがない」という状況に陥っている彼らの姿が、自分自身の経験と重なり、問題意識を強く感じました。

学びの集大成となる
卒業論文に全力で取り組む

大学時代の集大成として、最も力を入れたのが卒業論文です。社会に貢献したい、課題を解決したいという思いを持ちながらも、どのテーマに絞るべきか初めは悩んでいましたが、「近江楽座」の活動の中で、「外国人の方はゴミ分別のルールを守れないと言われており、時に地域住民と摩擦が起きている」という話を知り、「外国人によるゴミ分別の問題」をテーマとすることに

論文を学会に提出しました。調査を通じて自治体の方から「このようなテーマで調査してもらえて助かりました」とコメントをいただき、学生という立場から、実際に社会にある課題に対して解決策を提案できたことに大きな喜びを感じました。

教員との距離が近い
アットホームな環境が魅力

卒業論文の執筆においては、ゼミの先生がマンツーマンで熱心に指導を行い、何度も相談に乗っていただきました。卒業論文のことだけでなく、進路の悩みやプライベートまで、どんな話でもいつも親身になって聞いてくださったことをよく覚えています。先生とは卒業後も交流があり、就職してからも時々近況報告をしています。

ゼミの先生だけでなく、学科の他の先生方とお話する機会も多くありました。また、他のゼミのメンバーと一緒に作業するなど、研究室をよく行き来していました。環境政策・計画学科は全体で40名程度なので、教員と学生の距離が近く、学生同士も和気あいあいとした雰囲気。アットホームな環境で学べるのは大きな魅力だと思います。

また、私は「近江楽座」と天体観測のサークルに所属していましたが、他学部の学生や先生方とも交流がありました。四つの学部があり、それぞれ方向性が全く違うので、さまざまな個性や考え方に触れられるのも滋賀県立大学ならではの特長かもしれません。友人たちとキャンパスのすぐそばにある琵琶湖を散歩したり、満点の星空を眺めたり、スキーやスノーボードに行ったり

決めました。このテーマなら、「近江楽座」の活動で学んだ多文化共生の問題と、学科で勉強してきた環境問題の二つを掛け合わせた研究ができるかと考えたのです。

まずは、外国人の方による「ゴミ排出に関する問題」が、実際はどこでどれくらい発生しているのか、発生している場合どのような対策がなされているのか、現状を把握するために、全国の約800の市に対してアンケート調査を行いました。20ページほどのアンケートを作成し、メールや郵便で送付。約半数の市から回答を得ることができました。

また、自治体が外国人の方に対してどのような情報提供をしているのかを知るため、外国語で発行されたパンフレットを取り寄せて内容を調査しました。同時にヒアリングを進めていくうちに、外国人の方に対してどのように「コミュニケーションをとれば良いのか」わからない、予算の問題で外国語のゴミ分別ガイドを制作できていないなど、自治体によってさまざまな事情があることがわかってきました。

外国語パンフレットを制作している場合でも、日本語版では「ゴミ分別の意義まできちんと書かれているのに、外国語版ではゴミ収集の日付や方法しか書かれておらず、なぜ分別が必要なのか」という説明までは翻訳されていないケースが多く見られました。こうした現状を知り、日本と外国では意識も習慣も異なるうえで、きちんとした説明もなされていない状況では、なかなか分別が進まないという結論に達しました。

各自自治体にアンケートやヒアリングを行った結果をまとめ、解決策についても提示したうえで



と、自然豊かな環境とのびのびとした学風の中で、充実した大学生活を送ることができました。

環境課題や社会課題の
解決を目指して就職

卒業後は、大学での学びを活かしながら、環境課題や社会課題を解決できる仕事に就きたいと考え、就職先を探していました。NPOへの就職も考えましたが、新卒での就労は難しいと感じていました。そこで出会ったのがアマタ株式会社です。「持続可能な社会の実現」というミッションを掲げ、企業と自治体の両方に働きかけるサービスを展開している点、そして、民間企業という立場からビジネスの力を使って、環境やサステナビリティの向上に取り組んでいる点に魅力を感じ、就職を決めました。私が所属するカスタマーリレーションチームで

石田さんまつわる
あれこれ
AREKORE



未来のサステナビリティ経営・
町づくり情報サイト
おしえて!アミタさん

アマタ㈱が運営するサステナブルな企業経営・地域づくりに役立つ情報を発信するウェブサイト。石田さんは、先進企業へのインタビュー記事や最新トレンドなど、サステナビリティ経営のヒントとなる記事を作成している。

>>> URL: <https://www.amita-oshiete.jp/>



恩師・金谷先生と
旦那さん

同じ学科の同級生と結婚。金谷先生は勉強のことからプライベートのことまで、何でも相談できるお父さんのような存在でした。



左が旦那さん、中央が恩師の金谷先生

県大時代の思い出アーカイブ

大学時代の思い出の数々をお伺いしました

バレーボール部の思い出

スキー

滋賀には奥伊吹などのスキー場が近くにあり、授業をさぼって学部の友人とよく遊びに行きました。バレー部のメンバーとは日帰り岐阜県のスキー場によく行きました。



居酒屋「市場」

バレー部員は皆お酒が好きで、この店には部活の後や打ち上げなどでよく行きました。ここでは言えませんがこの店では色々な事件が発生しました。今ではいい思い出です。

部室

授業が終わってから部活の時間まで、部員のみならずよく遊びました。思い出の詰まった空間です。



津田 宜季さんの思い出

ピアノシモのフリンパフェ

大学内にあるカフェ「ピアノシモ」のプリンパフェ、通称プリパをかけて、学部の友人とフリースロー対決をしていました。味はあんまり覚えてませんが…プリンが丸ごと入っていて、その当時、贅沢な気分させてくれるパフェでした。



石田 みずきさんの思い出

B1-206 研究室



なぜか、他のゼミ生も集ってしまうB1-206研究室。私もしょっちゅう入り浸っていました。よく鍋パーティーをしました。



大学の図書館

滋賀県立大学は建物のデザインが面白く、特に図書館のデザインが好きでした。中でもお気に入りなのが入口の天窗。行くたびに見上げていました。図書館ではテスト勉強もたくさんしました。

Clap dining



大学の食堂も大好きですが、たまに贅沢して環境科学部棟近くのカフェClap diningに行きました。在学中に今の場所に移転され、近くなって嬉しかったのを覚えています。オムライスが絶品です。



国際マネジメントのフィールドワーク

は、企業の経営企画や環境・CSR・事業開発などの部門に携わる担当者の方に向けて、ウェブサイトやメールマガジンの運営、セミナー企画などを行い、サステナビリティ経営に関する最新動向について情報発信をしています。

日々の仕事では、お客さまがどのような課題を抱えているか、相手の立場になって考え、最適な情報を提供することが求められます。その際、課題を発見する力や、自ら考え企画して提案する力など、学科で学んできた経験が活かされていると感じます。また、メールマガジンの読者の方にアンケートを行った際は、大学時代に取得した社会調査士の分析や調査のスキルが役に立ちました。

先が読めない世の中で新しい価値を生む取り組みを

人口減少、少子高齢化、気候変動、資源枯渇

など世の中の課題はさまざまなのがあります。より広い視野で社会の課題をどうやって乗り越えていくのか、企業や自治体の社会的価値というものが一層求められています。また、先行きが予測できない世の中で、新しい価値を生み出せるようになっていかなければいけません。

私たちの主なお客さまである製造業においても、今までのように製品を作って売っただけのビジネスではなく、ついでに、製品を作る側と使う側という関係性だけではなく、消費者とコミュニケーションを取り、一緒に暮らしを豊かにしていくような取り組みができないか、という事業をすれば世の中の役に立つのか、どの企業も模索していると感じます。自治体においても持続可能な町づくりは重要です。私たちが環境活動を支援するだけではなく、皆さまと共に「ビジネスの力で社会課題を解決する」と新しい価値づくりを行う「取り組みを進めていきたい」と考えています。

自分らしいテーマを見つけ充実した大学生活を

アマタ株式会社に入社し、今年で6年目になります。この6年の間に、環境問題に対する社会の意識も大きく変わってきました。特に2015年にSDGsが発表されてから、企業の持続可能な取り組みがより推進されています。私は大学時代に、持続可能な発展とは「将来の世代のニーズを損なうことなく、現在の世代のニーズを満たす」と学びました。



環境問題やエコというと、将来のために我慢するというイメージになりがちですが、将来と現在がWin-Winの関係であるべきだと私は考えています。もちろん簡単なことではありません。答えはなかなか出ないのですが、そういうマインドで取り組んでいきたいという思いが強くなります。

滋賀県立大学で学ぶ学生の皆さんへ

あなたは今、どんな夢を持っていますか。そして、どんな社会になればいいかと考えていますか。世の中の課題には、一筋縄ではいかないこと、答えが出ないこともたくさんあります。進路に悩むこともあると思います。そんなときは、ぜひ胸に手をあてて考えてみてください。こうしたらもっと良くなるんじゃないか「こんなことにチャレンジしたい」というテーマが、きっとあるはず。今はわからなくても、とにかく何かに取り組みんでみれば、自分に合うテーマに出会えるかもしれません。わからないことや知りたいことがあれば、先生や地域の方、クラスメイトなど、周りの人にどんどん尋ねてください。滋賀県立大学の先生方は、親身になって教えてください。方ばかりです。きっと道が開けると信じています。

石田 みずき いしだ・みずき

[環境科学部 環境政策・計画学科 2014年度卒業]

2015年アマタ入社後、マーケティング部門・広報部門でウェブサイトやメールマガジンの運営、セミナー企画などを担当。日々、企業の経営企画部門や環境・CSR部門、自治体担当者に向けて、サステナブル経営・地域づくりに関する最新動向について情報提供を行う。

